

[研究ノート]

# タイにおける寺院の社会的活動と地域社会

## —仏教とソーシャルワーク研究予備調査ノート—

松菌（橋本）祐子\*

Key words：寺院，地域社会，ソーシャルワーク，社会開発

### はじめに

上座部仏教が広く普及しているタイには、2015年のタイ国立仏教協会のデータで33,902の寺院があり、265,355人の僧侶、76,352人の見習い僧がいる<sup>1)</sup> タイでは日本のような檀家制度がないため世帯が寺院に帰属せず、寺院と地域社会がさまざまな関係を持ってきた。寺院の9割がマハーニカイ派の寺院であることもあり、農村部では1つの村に一つの寺院があることが一般的である。

淑徳大学アジア国際社会福祉研究所では、2015年から「アジアのソーシャルワークにおける仏教の可能性」に関する研究プロジェクトが実施されている。2016年8月と10月にこのプロジェクトの一環として研究員の安藤と共にタイを訪問した。<sup>2)</sup> タイでは共同研究者のタイソーシャルワーカー協会会長のソバ先生、マハマクット仏教大学のスライ先生のご協力を得て、いくつかの寺院の福祉的活動をご紹介いただき、また、今後の研究についての議論を行った。

本研究ノートの目的は、タイにおける寺院の福祉的活動の2つの実践例を紹介しながら、これまでの筆者のフィールド経験やタイの地域社会研究の知見に照らし、タイにおける寺院の福祉的活動を含む社会的活動および、地域社会との関係について予備的考察を行うことにある。

## I 寺院による社会福祉活動の事例

### 事例1 スワンケオ寺（ノンタブリー県）貧困者救済事業を行っている寺院

この寺院は、バンコク都の西北に隣接するノンタブリー県にある。この寺院には大きな本堂（ウボーソット）や講堂（サーラー）のような建物はなく、森と竹林の中に施設が点在している。住職のパヨーム師が大人数に説法をする場所も木に囲まれた広場である。（写真1）小さな仏像

---

\* 淑徳大学総合福祉学部教授



写真1 パヨーム師講話の様子（筆者撮影）

が置かれた四阿が本堂と呼ばれている。寺院の僧はパヨーム師以外に4人である。

この寺院をはじめたパヨーム師は、1949年にこの地区で生まれた。1967年に近くの寺院の見習い僧になりその後出家した。1978年に現在の場所にスワンケオ寺（当時はわずか3ライ）を開き、

その後周辺の土地（農園を含む）を加えて今では168ライにまで広がった。<sup>3)</sup> 寺院の歴史はおおよそ40年になる。

1986年に財団を設立した。（写真2）ノンタブリー県のほか、サムートサコーン県、ブリラム県、ターク県、ラヨン県など中部タイだけでなく東北タイ、東部タイなど10か所に財団の支部を持つ。これらは、それぞれの場所で土地が寄進されたことによる。2011年の寺院パンフレット資料によれば、財団の収入は、パヨーム師の仏教の説法・講義 10%、テープや本の売り上げ 10%、積徳（タンブン）でのお金 10%、物での寄進 60%、事業収入（農業、小規模製造業など）10%となっている。銀行や企業からの寄付もある。財団に寄付が多く集まるのは、パヨーム師個人への崇拜が大きく影響していると思われる。

この寺院の事業のスタートは廃棄物リサイクル業である。現在は、リサイクル業、農業（果樹園、花卉）、小規模製造業（木工家具修理製造）を行い、高齢者、失業者、貧困者などに就業、自立支援を行っている。現在、寺院の周辺の工場も含めて600-700人が働いているという。<sup>4)</sup> 寺院の敷地内には宿舎があり、若干の生活費（食費）が必要である。高齢者には身寄りのない人が多いが、家族を持つ人もい



写真2 スワンケオ財団事務所（筆者撮影）

る。基本的に自分の身の回りのことができる人が対象となっており、要介護の方は福祉施設に入ることになる。

敷地内には孤児を対象にした施設や尼僧の宿舎も設けられている。この施設で育って現在は財団のスタッフになっている者もいる。宿舎は短期的滞在にも使用することができ、ボランティアなども宿泊できる。長期に滞在する尼僧の部屋はそれぞれシャワールームがあり、エアコンもある。案内をしてくれた尼僧はパヨーム師を深く尊敬し、子供が独立した後から、年に3か月程度の滞在を18年間ほど続けている。

果樹園のエリアを案内してもらったが、それほど肥沃な土地ではない。しばしば洪水に見舞われるような土地で、バナナ、ドリアン、マンゴーなどを混植していた。廃棄物リサイクルの一環として、竹などの木材を砕いた有機肥料を使用している。東北タイや北タイでは米の栽培を行っている支部もある。農産物や家具等の製造業製品は、市場経済的に見れば品質面でも価格面でも競争力はそれほど高くなく、零細農村工業のレベル程度である。低所得者向けの福祉的就労の側面がないとはいえない。

## 事例2 プラバートナンプ寺（ロブリー県） エイズホスピスを営む寺院

プラバートナンプ寺は、バンコクから北西におよそ160km、ロブリー市街地から少し離れた山腹にある。寺院は1976年に始まったが、1988年に現在の住職アロンコット師が入ってから活動が大きく変化した。

アロンコット師は1953年ラーブリー県生まれ、工学部を卒業し公務員をへて1990年に出家した。1992年からエイズ患者のプロジェクトを開始した。タイでエイズの問題が深刻化していた1990年代後半から2001年にかけて、この寺院には毎年1,000人～1,500人のエイズ患者が訪れ、300～500人がこの寺院で亡くなり火葬された（佐々木・櫻井 2012）。患者のミイラや遺骨が納められた会堂は、見学者がまず案内される場所である。（写真3）この寺は当時はエイズホスピスとして有名であったが、2000年代半ばから抗レトロウイルス薬（ARV）のジェネリック製造の普及に伴い状況は大きく変化し、今日ではHIVとともに生きる活動が中心となっている。寺院の敷地内には、病棟やリハビリセンターの他に財団



写真3 プラバートナンプ寺 納骨堂（筆者撮影）



写真4 プラバートナンプー寺 病棟 (筆者撮影)

の事務所、患者家族の宿舎や看護師、ボランティアの宿舎などがある。(写真4) 今日では医療的なケアが必要な患者はほとんどおらず投薬管理が中心である。医師はロップリー市街地から通い、看護師が常駐している。看護師はアロンコット師の奨学金を受けて看護学校を卒業し、その後病棟での勤務が義務となっている。介護を担っているのは、症状が軽くなった元患者である。この寺院には僧が12人いるが、HIV感染者も含

まれている。<sup>5)</sup>

アロンコット師が直接患者に接することは少ない。寺院の運営には莫大な費用がかかる。彼のカリスマ的な存在が、この寺院に多くの寄進が集まる要因であり、そのため師は講演他で寺院を離れることが多い。この寺院はエイズ寺として有名であり、企業、外国からのスタディツアー等も受け入れている。来訪者は必ず事務所で寄付の手続きを取らされる。

タイにおいて、エイズに感染することが直ちに死を意味しなくなった今日でも、HIV患者およびその家族は地域社会の中でのスティグマを抱え、社会的に排除されがちである。この寺院はそれらからのがれる場所となっており、福祉制度で包摂されない人々の「居場所」としての特異な寺院と考えられる。将来に向けた活動として、感染者による自立をめざし、農場を建設し「生き直し」の場の形成を行っている。

### 小括

ここまで見てきた2つの寺院は、タイの研究者から寺院による社会福祉活動のgood practiceの事例として紹介されたものである。広く尊敬を集める僧が始め、継続的に社会貢献的活動を行っている事例と言える。寺院として有名で報道にも取り上げられ、財団では英語のHPも開設している。中心となる僧とその活動に対して多くの寄進を集め財団により事業を運営している。good practiceは、特徴のある僧侶がいる寺院の実践であり、現在の福祉制度においてカバーされにくい領域に対して、傑出した僧が行っている活動と言う側面が大きい。筆者がこれまでに農村調査や都市での地域調査で経験してきた寺院に比較すると、非常に特殊な寺院と感じる。次節では、これまでのタイ地域研究にみられる、寺院と地域社会の関係の例を挙げる。

## Ⅱ タイにおける寺院の社会的活動と地域社会

### 1. 1990年代～2000年代 農村における寺院の活動：筆者の農村調査から

筆者は1990年代から2000年代にかけて中部タイの米作農村でフィールド調査を行っていた。この農村は、筆者がかかわる以前の1980年代から調査が行われており、村の社会史をうかがい知ることができる。かつては交通が不便でバンコクへの出稼ぎも行われていた米作農村は、今日ではバンコクへの通勤者もいる近郊農村になった。このような村落の人々の生活と寺院は、日常的な関係の中にある（北原編 1987）（赤木・北原・竹内編 2000）。

日々の托鉢への積徳（タンブン）により寺院の僧の生活が支えられている一方、寺は地域の人々の生活とさまざまな形で関わっている。村の青年は、数か月の修行僧としての出家を村の寺で過ごすことが多い。冠婚葬祭は村の寺で営まれ、新築祝い、得度式など村落の人々の生活儀式には僧が頻繁に出向く。毎週、寺では講話の会が開かれており女性（特に高齢の）が集う。さまざまな悩み事を相談する場でもある。

村にある小学校の教員と共に村での「知識人」である僧は、村での医療、教育、福祉も担ってきた。薬草の知識のある僧は伝統医療を行い、貧困層の子どもには見習い僧として寺で基礎教育を受ける者もいた。さまざまな障害のある子どもの居場所になっていることも観察された。

寺院には村落の公共空間としての役割もある。村の集会には寺院の施設が使用され、定期市、お祭り、子供たちの遊び場やサッカー場、米の乾燥場などに使用される空間でもある。村の歴史をみると、数家族の開拓移住によってできた村には最初、寺はなく、現在ある本堂、講堂、布薩堂、火葬場、庫裏等の建物は、村民等からの寄進や労働によって、少しずつ作られていった。<sup>6)</sup>

1970年代～2000年代にタイ農村でフィールド調査を行った研究者にとって、村の生活の中心にあり、地域と密接にかかわる寺院と僧はある意味自明のこととしてある（例えば水野 1981、桜井 2008b）。

### 2. 1960年代の地方都市における寺院と地域社会

人類学者であるブンナックは1966-67年に中部タイのアユタヤで15の仏教寺院において、寺院と地域社会、僧と俗人の関係についての実態調査を行った。この調査を通じてブンナックは、上座部仏教が個人の救済を一義としていながら、タイ社会の中では地域社会と深くかかわっていることを示した。ブンナックが調査したアユタヤは、かつては王朝も位置した中部タイの地方都市である（Bunnag 1973=2007）。

寺院の僧は地域社会に支えられ、地域社会と関係を持ち続ける。物質的に地域の人々の支援なしには生存できない。また、財団の形成やカティン祭など寄進を集める仕組みが重要であることも指摘されている。地域社会の人々は僧侶や寺院に食糧、金銭、物品、土地などを寄進し、労力を提供する。このような行為によって自らのために功德を積むのである。近所の寺院だけでなく、

著名な寺院や、著名な僧への寄進もある。このような寄進のしくみが現在のスワンケオ寺やプラバートナンプ寺の実践を支えていると言えるだろう。寺院委員会には区長や有力者など地域社会のメンバーが参加し財政や運営にも関わる。この委員にはイスラムや大乘仏教の住民が参加することもあった。すなわち、宗教組織としてではなく、地域組織としての働きもしていた。

今日の都市部の寺院では教育機会を求めて地方から僧が集まっているが、アユタヤの寺院には当時から農村部出身の僧がいた。彼らは、さまざまな儀礼を通じて地域社会と関わる。ブンナックの調査でも教育施設を持つ寺院では見習い僧が多いことが指摘されている。都市の富裕層には仏門に入る人は少ないが、寄進や運営への関わりを通じて寺院を支える側になっていたのである。ブンナックは、僧侶になることが、貧困農村の青少年の社会的立身の経路になる事実を指摘している。このように、彼が指摘した地方都市の寺院の実態は、90年代以降の農村部の寺院でみられた地域社会と寺院の関係や寺の社会的活動について示唆に富んでいる。

### Ⅲ 今後の検討課題：論点整理

事例報告と、過去のフィールド調査等を踏まえて論点、検討課題を整理しておこう。第一は寺院の社会的活動についてである。今日、寺院の社会的活動は宗教的活動と地域貢献活動の相補的不可分の状況にある。個人救済を第一義的とする上座部仏教の寺院は、一方で社会の中では地域社会と関わりあって存在し社会的活動を行ってきた。しかし、今日では市場経済の浸透、都市化、都市的生活様式の普及でそのあり方が変容し、行政、教育、福祉等の制度やサービスの普及でそれらの活動は代替されつつあると言える。かつて寺院はタイの村落地域社会の中心にあった。今日タイの6割を占める農村部では農家の割合は減少しているが、地域社会において寺院の位置づけが重要であることに変わりはない。すなわち、西欧起源の社会福祉制度やソーシャルワークの概念が導入される以前に、地域社会の中心に寺院があり、村落の人々の生活と深くかかわって存在してきた。村落における「知識」「知恵」は寺院に集約されていた。修行僧の多くは村人であり、村の人々の寄進と日々の積徳（タンブン）によって寺院および僧が支えられていた。教育や医療が整備される前には、寺院は福祉的活動のみならず、教育、医療も担っていた。

このような、伝統的な仏教寺院や僧の活動は、伝統的な仏教ソーシャルワーク、あるいは、宗教の社会的貢献としてとらえてよいのだろうか。タイの村落研究を行っている人類学者には、ソーシャルワーク (social work) ではなく、社会的活動 (social activity) と記述する研究者もいる (例えば桜井 2008a・岡部 2014)。タイ語での「社会福祉」実践は「社会開発」の一部としてとらえられる。2000年以降、徐々に整備が進むさまざまな社会福祉制度 (例えば医療福祉制度である30パーツ医療制度) は、近年まで維持されてきた、とくに農村部の地域社会と寺院の関係性を利用した形で浸透していったのではないかとの示唆もある (河森 2009)。

タイチームでは、量的調査の設計にあたって、共同研究者と議論を重ね、寺院の様々な社会的

活動を「福祉的活動」「教育的活動」「宗教的活動」と大きく分け、その細目の活動状況とその要因を検討しながら、「広義の仏教ソーシャルワーク」を考察している。社会福祉の法制度の歴史が浅いタイにおいて、社会開発をめざす活動を、タイ語での社会的活動＝ソーシャルワークと解釈されるため、実際行われている活動の側からの調査を企画した。

第二点は、ソーシャルワーク実践の中での「仏教的価値観」についてである。今回の予備調査においては、タイの研究者、MSW、NGOのワーカー等と「仏教ソーシャルワーク」についても議論を行った。前述のとおり、量的調査では仏教ソーシャルワークを広義に捉え、寺院や僧が行う社会的活動として活動の実態を捉えようとしている。一方で、議論の中では、「ソーシャルワーク」は人間的価値にもとづいておこなう福祉実践であるから、タイ人の持つ「基層文化としての仏教的価値観」は、さまざまなソーシャルワーク実践に反映すると主張する僧や研究者やNGOワーカーもいた。この点については、まだ議論が始まったばかりであり今後の課題である。

## 【注】

- 1) タイ国立仏教協会『寺院と仏教の統計2549 (2015) 年版』(タイ語)による。(http://www.onab.go.th/wp-content/uploads/2009/07/2559.pdf) (2016年10月20日取得)
- 2) 今回のプロジェクトでは、タイにおける寺院の社会福祉的活動を包括的に捉えるため、ある県をとり上げて量的調査を実施している。この2回のタイ予備調査は、調査方法の検討、調査票内容の検討の打ち合わせ、量的調査のプリテスト等が主要な目的であった。この調査に基づく報告は、安藤が行っており、アジア国際社会福祉研究所から近刊の書籍に所収される。
- 3) 1ライは0.16ha。スワンケオ寺のデータについては、訪問時のインタビューおよび以下の資料による。2011年発行の寺院のパンフレットMahaburus kong kaya(タイ語) スワンケオ寺HP(財団のHPのみ英語) <http://www.kanlayano.org/>
- 4) 案内をしてくれた尼僧の説明による。(2016年8月)
- 5) 病院の看護師とボランティアへのインタビューによる。(2016年8月) プラバートナンプ寺HP (<http://www.phrabatnampu.org/>)
- 6) この村では、1970年代後半に調査を開始した当时には、小さな本堂のみの寺院であった。訪問するたびに少しずつ建物が増え寺院が立派になっていった。90年代に火葬場も建設され、2000年ごろから建設がはじまった回廊のある布薩堂の完成には10年を要した。

(本研究ノートは私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「アジアのソーシャルワークにおける仏教の可能性に関する総合的研究」の助成による研究の一部である)

## 【文献】

- 赤木 攻・北原 淳・竹内隆夫編(2000)『統・タイ農村の構造と変動—15年の経験』勁草書房。
- Bunnag, Jane, 1973=2007, *Buddhist Monk, Buddhist Layman: A Study of Urban Monastic Organization in Central Thailand*, Cambridge University Press.
- 河森正人(2009)『タイの医療福祉制度改革』お茶の水書房。
- 北原淳編(1987)『タイ農村の構造と変動』勁草書房。
- 水野浩一(1981)『タイ農村の社会組織』創文社。

- 岡部真由美 (2014) 『「開発」を生きる仏教僧—タイにおける開発言説と宗教実践の民族誌的研究—』 風響社.
- 桜井義秀 (2008a) 『タイ上座部仏教と社会的包摂—ソーシャルキャピタルとしての宗教』 明石書店.
- 桜井義秀 (2008b) 『東北タイの開発僧—宗教と社会貢献—』 梓出版社.
- 佐々木香澄・櫻井義秀 (2012) 「タイ上座部仏教寺院と HIV/AIDS を生きる人々—プラバートナンブ寺院を事例に」 『年報タイ研究』 No.12, 21-41.